


2022年度 トコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/27

<p>団体名</p>	<p>NPO法人 育て上げネット</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>夜の居場所を通じて非行・再犯・犯罪被害から子どもを守るためのアウトリーチ事業</p>		
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■ 活動風景</p>		
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>【ビジョン】すべての若者が社会的所属（※）をもち、働く働き続けるを実現できる社会 ※若者が安心を実感し、挑戦できる関係性ある場 特に、一旦社会参加に困難を抱える状態に陥ってしまう問題は長期化、固定化、不可視化されやすい。そのため、早期に問題解決に向けたアプローチが重層的にあることが望ましい。 子ども・若者期の困難な状態として、不登校やひきこもりや自殺といった「非社会的な反応」以外にも、非行や犯罪や大人への反発といった「反社会的な反応」もあり、それらのすべての問題に対して、「やり直し」がきく社会になっていたり、予防的な仕組みや活動が存在したりする状態を目指す。</p>		<p>夜のユースセンターの様子</p> 		
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>【ミッション】若者と社会をつなぐ 若者を社会につなげる支援活動だけでなく、社会の側に若者に寄り添うような働きかけを行う。 方向性として3つの活動があり、①直接支援、②支援基盤強化、③生態系創出に分けられる。 ①非行少年（少年院出院者等）に対してはアウトリーチし接点を作ること、生活や就労を支援し、再犯を防ぎながら、更生自立を支援する。その他、夜間にリスクを抱える子ども・若者を「場」で支える。 ②更生支援に関わる子ども・若者支援者増や地域の見守り力（団体ネットワークや市民参加）向上。 ③非行少年、夜間にリスクを抱える子ども若者、更生支援について、広く一般に情報を届けて応援者を募る。また、行政機関や企業などと連携し、彼らを支える仕組みと座組みを作る。雇用主とも保護司とも違ってゆるやかに少年とつながり続ける大人・団体のネットワークをつなげ、広げていく。</p>				
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>【人材育成】：★最重要★子ども・若者の更生自立を直接支える経験豊富なスタッフ（山を高く）。子ども・若者支援者に非行少年・更生支援に対して拒否しないマインド/関心・知識を持ってもらう（すそ野を広く）。 【リソースの確保】：必要な対象者に提供する衣・食・住、家庭外の居場所や逃げ場として活用できるスペース、デジタルを活用したアウトリーチに必要な基盤・ソフトウェア 【活動資金】：少年のニーズに即応できる機動性/自由度の高い資金、長期にわたる自立を支える継続的/安定的な資金基盤（単年度の継続などではなく） 【ナレッジ】：更生自立支援に求められるマインドやスキル、事業化・仕組み化に有効な資源やプレーヤー</p>				
<p>■ 活動報告</p>			<p>■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>		
<p>●夜のユースセンターの立ち上げ 日中帯の支援を利用する子ども・若者の夜間ニーズから対応を始め、次に立川市子ども・若者自立支援ネットワーク会議の関係機関などに周知し、積極的に対象層へのアウトリーチを行った。 ●矯正施設等を通じた少年へのアウトリーチ 矯正施設等にいる/出る少年と接点を持つため、施設を訪問し、職員との関係づくりや施設内での少年との接点づくりを行った。 ●担い手を増やすための研修等 法人内外の支援者や地域市民に向けて、非行少年支援や更生支援に関する研修会を行った。講師には現地へ来ていただき、オンライン配信も同時に行った。 ●活動基盤の強化 広く社会に対して見る・聞く・知る機会、接する機会を作るため、少年院スタディツアーやウェビナー、寄付者向けサイトでの情報発信を行った。</p>			<p>●夜のユースセンター運営 毎週土曜（18～21時）継続的に実施した。毎回20～30名の若者が来所（少年院出院者や非行・犯罪被害リスク者は5～10名）、食料・生活用品を提供した。 ●矯正施設等を通じた少年へのアウトリーチ ①愛光女子学園・茨城農芸学院内での学習支援やPC講座：39回（114名） ②東京西法務少年支援センター内での就労支援セミナー：8回（8名） ③少年院内での支援面接：7回（7名） ●担い手を増やすための研修等 第1回：2023年1月7日 講師：安部顕氏（元法務教官） 第2回：2023年7月26日 講師：紀恵理子氏（元少年鑑別所長、法務省矯正研修所 所長） ●活動基盤の強化 少年院スタディツアー4回、寄付者向けウェビナー2回、寄付者向けサイトでの情報発信12回（毎月1回）</p>		
<p>■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■ 望ましい社会状況を達成するための課題</p>		
<p>土曜の夜間帯の勤務となるため、スタッフ体制構築の難しさや、特定のスタッフに会いに来る子ども・若者もいるため、対応スタッフが固定化されがちという課題があったが、立川の実施拠点以外のスタッフが参加することにより、以前よりも多様なスタッフ（性別/年齢）が関われるようになった。同時に、若者に関わる支援者も分散されることで、適切な距離感を保ちやすくなった。また、来所する若者の人数が増えてきたこと、かつ配慮が必要な方も一定数おり、キャパシティの問題もあることから、対応できる数が限られている。そのため、紹介元となる連携先の関係機関とスタッフが密に連携し、個別に誘導する流れが確立しつつある。</p>			<p>●夜間帯に集まれる居場所が少ない 夜のユースセンターには、毎回20名上の若者が来所しており、日を追うごとに増加傾向にある。食料や生活用品を必要とする若者も多い。一方で、キャパシティの問題もあることから、対応できる数も限られている。少年院出院者や非行・犯罪被害リスク者も含めて集まれる居場所が広がる必要がある。 ●支援機関（支援者）の不足 出院者の抱える課題が複合的であり、また、家族の協力が得られない場合も多いため、既存の支援機関単独では対応しきれない場合が多い。 ●少年と繋がることの難しさ 少年が自ら率先して相談支援窓口へ行くことはほとんどないため、在院中から関係構築に努めたり、更生保護団体の支援者と積極的にネットワークを構築し、アウトリーチを行うことが必要である。</p>		
<p>■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>夜のユースセンターの継続的な運営と、支援者の育成、活動基盤の強化</p>	<p>を達成しました。</p>
<p>■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>以前まで夜の繁華街に通っていた少年と夜のユースセンターで繋がることができた。継続的に通ってくれるようになり、一緒にお弁当を食べてゲームをしたり、雑談をしていた。その後、就職し、今でも仕事帰りに近況報告に来てくれている。</p>		